ムショ医になってみて

網走医師会
網走刑務所
大松　広伸

レジデント時代も含め26年間勤めた国立がん（研究）センターを退職し、３年前に故郷の網走市に戻りました。網走刑務所に行くというと、冗談にしか聞こえなかったらしく、なかなか信じてもらえませんでしたが、嘘じゃないと分かると、そんな怖いところに行って大丈夫？と、多くの方が心配してくれました。確かに不安はありましたが、法務省幹部の方々が東京拘置所や網走刑務所を見学させてくれ、私や家内の不安を払拭できるようにご尽力くださり、また基本的に犯罪を犯すような受刑者は体が元気な人だろうと多少楽観視していました。

網走刑務所は６年間常勤医不在の状態でしたので、私の赴任は大変喜ばれ、厚遇していただけたように思います。がんセンター時代もそれなりの身分でしたので個室でしたが、その倍以上の広さのお部屋を与えていただき、パソコンも新規に購入していただきました。レジデントは居なくなり、研究費を失って秘書さんを雇えなくなりましたが、積もり積もった面倒な雑用（経営改善、広報、情報システム・電カル管理、診療情報管理、がん登録等）からは開放され、何より常に病棟に重症患者、時々は治療関連死になりそうな患者を抱えていたことからの開放感は大きいです。

ただこれまで肺がん一筋でやってきましたから、それ以外のことはすべて一から復習し直しです。急病以外はあらかじめ症状を伝えられてから診察に連行されるので、分からない場合はいろいろ調べてから診療に当たることができます。来てみて、確かに元気な人が多いのですが、抗精神病薬が必要な受刑者が多いことと、眠剤、鎮痛薬や鼻炎薬、外用薬の処方が一般社会に比べてずいぶん多いと思います。医療費は全額国負担ですから、症状を大げさに言って、私が本当にそうなのか見極めきれていないんだと思います。懲役労働をしたくないがために、腰痛症状やめまい症状を偽る人も時々いますし、アルコール欲しさに消毒液を飲むという事案もありました。つい先日は朝からろれつが回らず失調様症状が出現した受刑者がいて、脳卒中かと急遽外部医療機関を受診させましたが脳に異常は無く、後で咳症状に処方してあった中枢性鎮咳薬をまとめ飲みしたと発覚した事例もありました。

矯正ならではの苦労もありますが、転職したことを後悔はしていません。社会的地位は高くなく誰もしたくはない仕事でしょうが、だからこそやりがいを感じながら続けていこうと思っています。

障がい者スポーツに思う

札幌市医師会
広田医院
森田　　肇

私が障がい者スポーツと出合って20年以上が経ちます。そのきっかけは1996年にアトランタでパラリンピックを観戦したことです。以来、車いすバスケットボールや車いすマラソンなどのスポーツに関わってきました。来年はいよいよ東京2020。日本でのパラリンピックの開催は1964年の東京大会と1998年の長野大会に次いで３回目になります。大会が近づくにつれてテレビ・ラジオの番組やCMなどにアスリートたちの露出が増えていますが、以前は健常者のアスリートがほとんどで、障がいのあるアスリートが出ることは少なかったと思います。しかし最近は、パラリンピアンもメディアに出ることが多くなり、障がい者スポーツが特殊なものではなくなりつつあることを実感します。

障がい者スポーツには、健常者のスポーツ以上に医学的サポートが必要です。障がいの原因に対する治療やケアが継続的に必要な場合も少なくなく、また障がい自体がスポーツを行う際のリスクにもなりうるからです。障がい者スポーツに対する医学的支援を行うための資格として、日本障がい者スポーツ協会の制度で「障がい者スポーツ医」という認定資格があります。障がい者がスポーツを行う際に必要な医学的管理や指導を行うためのものですが、日本スポーツ協会認定のスポーツドクターや日本医師会認定の健康スポーツ医に比べ、その数はまだ少なく、全国で600名程度しかいません。スポーツを行う障がい者の増加や東京パラリンピック開催の影響により、資格取得希望者が増えつつありますが、現在は受け入れ人数を十分確保できないため、残念ながら抽選で受講者を決めている状況で、障がい者スポーツ医が増えるまでにはもう少し時間がかかりそうです。それまではその役割をスポーツドクターや健康スポーツ医の先生たちにも担っていただく必要があるかもしれません。また、障がいの種類はさまざまなため、障がい者スポーツ医は、スポーツ医学に関連する診療科に加えて、各種障がいに関わる診療科の参加も必要だと思います。

競技スポーツでトップアスリートを目指す人だけでなく、純粋に日常生活の中でスポーツを楽しむ人たちにとっても、今ある障がいの悪化や新たな障がいの発生を来すことなく、安全にスポーツを行える環境を作るためには、医学的サポートは不可欠です。東京パラリンピックの後も障がい者スポーツがさらに普及し、障がいを持つ人たちが安心してスポーツを楽しめる社会が来ることを心から望みます。